

パーソナリティ概念を用いた 行動説明にみられる方法論的問題点*

渡邊芳之^{*2}・佐藤達哉^{*3}

1. 行動説明の素朴な構成概念とパーソナリティ心理学

人が自分や他者の行動を記述したり説明したりする場合には、パーソナリティや欲求などを意味する構成概念を用いることが多い。人づきあいが苦手な人をさして「彼は内向的だからなあ」などと言ったり、「彼って優しいから、いつも家まで送ってくれるのよ」、「あんなことするのって、やっぱりあの子の自己顕示欲のあらわれよね」などと言う場合がその例であり、「内向的」、「優しい」、「自己顕示欲」がそうした構成概念に当たる。人間行動の説明に用いられるこうした素朴な構成概念のうちの一部は、そのままの形で、あるいは少し学問的な色彩を加えた形で心理学に取り入れられている。とくにパーソナリティ心理学においてこの傾向は顕著であり、そこで用いられる概念の多くは先に述べた素朴なパーソナリティ概念とでもいえる構成概念に翻訳可能である。パーソナリティ心理学ではこうした概念が「理論的構成概念」、あるいは「仮説的構成概念」として科学的理論の中で主要な役割を果たしているが、この点がパーソナリティ心理学を心理学の他の分野や、隣接する諸科学と比較して一風変わったものにしていてと考えてもよいだろう。

さて心理学界では、パーソナリティ心理学で用いられる諸概念が人間行動の説明に真に役立つのか、という問題がここ20年間にわたって激烈に論じられてきた(Mischel, 1968; 佐藤・渡邊, 1988; 渡邊・佐藤, 1989, 1990)。議論は多くの心理学者を巻き込んだが、今一つ論点をはっきりしないままである(佐藤, 1990参照)。こうした不鮮明さの一つの原因には、素朴な構成概念を理論的構成概念としてパーソナリティ心理学に導入する際の方法論的問題点がある。そこで本論文では、この問題を鮮明にした上でパーソナリティ概念と行動説明についての基本問題について論ずる。

2. 素朴な構成概念は傾性概念である

2. 1. 傾性概念の特質

先にあげたような人の行動を説明する素朴な構成概念は本質的に傾性概念(disposition-

*1 本論文は、東京都立大学・人格調査研究会において著者らを中心に行われた討論と、信州大学およびその周辺において著者らと大学院生深町和哉君との間で行われた討論を基礎として、渡邊がまとめたものである。討論に参加してくれた皆さんに感謝します。

*2 信州大学人文学部 助手

*3 東京都立大学人文学部 助手

*4 本論文では disposition の訳語は常に「傾性」である。哲学分野では disposition が「傾向性」あるいは「素質」と訳されている例があるし、心理学分野では「気質」と訳されることがある。

concept)であることが、以前から指摘されている (Ryle, 1949)。傾性 (disposition)⁴⁴は、ある条件がその事物あるいはその環境に対して成り立つときには常に、ある事象がその事物において生じる、という規則性が観察されたときに、その規則性全体を記述するために適用される概念である (Carnap, 1936, 1937, 1956)。たとえば、「木には可燃性がある」という場合、「可燃性」という傾性は、「一定の条件下で「火をつけたら燃えた」という個別事例の複数観察から帰納的に導かれた規則性を記述している。一方、鉄に何度も火をつけたが燃えなかったら、「鉄には可燃性がない」というだろう。ここでは、「可燃性」という概念は、外的条件や未知の規定要因の結果として生じている、「火をつけると燃える」という観察可能な規則性以外には何も意味していない。したがって、傾性は観察言語そのものではないが、観察言語に還元可能な概念である (Carnap, 1956)。同様に重要なのは、もし火をつけなければ木や鉄に可燃性があるかどうか自体わからないし、火をつけても木が湿っていたり、まわりに酸素が乏しかったりしたら木は燃えない一方、超高温にすれば鉄も燃えるのであるから、観察される規則性自体が先行条件に大きく依存しているということである。

このように、傾性概念は一定の条件下で観察された事象の規則性を抽象的に記述した、あるいは要約したものである。それが記述しているのは外的条件や未知の諸要因の結果として生じている規則性自体であり、そのままでは規則性の原因を説明するものではない。ましてや傾性が規則性の原因であることはありえない。「この木が燃えるのは、その可燃性が原因だ」という言説がトートロジーであることはあえて説明する必要もないであろう。しかし、「この木は可燃性であるから、火をつけたら燃えるだろう」という言説が有意味であることからわかるように、先行条件が大きく変化しない限り、傾性には時間的安定性があると仮定され、その範囲で現象の予測力を持ちうる。つまり、傾性概念は現象の原因を説明はしないが、限定された範囲で現象の予測力を持つのである。しかし、先行条件が変化すれば傾性は維持されないから、傾性概念が示す規則性には状況を越えた安定性は仮定されないし、状況が異なった場合傾性概念に事象の予測力はない。

2. 2. 素朴な構成概念の傾性的特質

傾性概念に特有のこうした性質は行動説明の素朴な構成概念にも明らかにみられる。たとえばA子さんがB君を「優しい」という場合、この素朴なパーソナリティ概念は何を意味しているのだろうか。「優しい」と思うようになったのには、A子さんとB君に親密な関係があるという先行条件のもとで、たとえば以下のような個別事例があったと考えられる。

1. 「デートから帰るとすぐに電話をかけてきてくれた」
2. 「待ち合わせに30分も遅れたのに怒らなかった」
3. 「私が泥酔してるとき変なことしないで介抱してくれた」
4. 「私のぐち話を黙って聞いてくれた」
5. 「私のストックングが破れてるのを見て見ぬふりしてくれた」

これらの事例からの帰納的論理によって、A子さんがB君を「優しい」と思ったとすると、「優しい」という構成概念は以下のような命題に還元することができる。

「B君には、私と親密な関係にあるという条件の下で、私が何か（してくれること、あるいはしないでくれること）を必要としているとき、いつもそれに気づいて実行してくれる傾向がある」

したがって、「優しい」という構成概念は一定の条件下でB君がA子さんに対して示した（あるいは示している）行動の規則性、すなわち「行動傾向」*5を抽象的に記述したものである。それが記述しているのはさまざまな社会的、個人的な要因の結果として生じている行動傾向自体であり、そうした規則性の原因についての情報は含んでいない。すなわち、傾性概念なのである。この例の場合、先にあげた個別事例のそれぞれも傾性概念を構成しており、階層構造を持つ傾性概念と考えることもできる。この規則性が維持されるとしたら、たとえば「私の下手な料理を文句も言わず食べてくれる」ことが予測されるが、これは一定の条件下で行動傾向が維持されていることを示しているに過ぎない。同じB君でも他の女の子には「優しく」ないかもしれないし、二人の関係という先行条件が変化していけばA子さんに対しても「ある日突然」優しくなくなってしまうかも知れない。傾性が維持されるのは前提となる条件が安定している間に限られるのである。

ところが素朴な知覚者は、傾性概念で示された行動傾向の前提となる外的条件をいとも簡単に捨象してしまい、傾性が記述した規則性だけを強調するようになる。本来「これこれの場合に誰々に対してB君は優しいと呼ばれる行動傾向を持つ」だったのが単に「B君は優しい」になってしまうのである。そして、傾性をたいがい行為者の内部（たとえば「性格」）に投影し、あたかもそれが行動にみられる規則性の原因であるかのように説明する。B君は「優しい性格」で、その「優しさ」が「優しい」行動傾向を生み出しているという、もともとその傾性概念が構成されたのとは全く逆方向の論理が生じるのである。すなわち、「結果の原因化」である。また、傾性概念が本来保証していたのは一定の条件下における行動傾向の時間的安定性だけであったのに、そこに状況を越えた安定性が仮定されるようになる。つまり、B君の中にある「優しい性格」が優しい行動の原因なのだから、外的条件が変化してもB君は優しい行動を示すはずと考え、もし優しい行動を示さなくなったら、先行条件の変化を吟味することなく「B君の性格が変わった」と説明するのである。よって、もしB君の行動が「優しく」なくなった場合、Aさんは外的条件の変化よりも「B君の性格が変わったこと」を原因と考えやすく、「性格の不一致」による破局が生じる。こうした知覚の歪みは広く人類一般に行き渡っていて、帰属理論では「基本的帰属錯誤」と呼んでいるほどである（Jones & Nisbett, 1972）。

「優しさ」以外の素朴なパーソナリティ概念も、おおむね同様の論理で構成された傾性概念でありながら、先行条件の捨象、人間内部への投影による結果の原因化、そして時間的安定性の状況的安定性へのすり替えを経て、行動の原因論的説明に用いられていると考えてよいだろう。同じことは、欲求、知性、あるいは自己といった、心的機能を説明する構成概念

*5 Carnap (1956) は法則性が常に成立しているものだけを「純粋傾性」と呼び、この場合一度でもそれに反する事実が観測されれば傾性概念は棄却されるとしている。しかし、素朴な構成概念の場合は一般的な傾向性として規則性が観測されれば傾性概念が成立し、またわずかな反証では傾性概念が棄却されることはない。その意味で素朴な構成概念は純粋傾性ではないが、広い意味での傾性概念ととらえることには問題はないだろう。

に関してもみられる (Ryle, 1949)。このように、行動説明の素朴な構成概念は多くの場合傾性概念であるが、その日常的な用法においては、それが一定の条件の下で現前している規則性の抽象的記述に過ぎず、規則性の原因を説明していないということはほとんど無視されているのである (Mischel, 1968)。

3. 心理学的説明における傾性概念と理論的構成概念

3. 1. 心理学に導入された素朴な構成概念の位置

これまで述べてきたように、人間の行動を記述したり説明したりするのに用いられる素朴な構成概念、特にパーソナリティ概念の多くは傾性概念であり、一定の条件で観察された規則性(行動傾向)を抽象的に記述しているに過ぎない。しかし、「攻撃性」、「社交性」、「依存性」など、基本的には素朴なパーソナリティ概念に基づいていると思われる概念が心理学に導入される際には、傾性概念とは異なる意味内容を持った概念として扱われていることが多い。たとえば、「受動性」というパーソナリティ特性は「受け身な人」などという素朴な構成概念を基礎にしているが、パーソナリティ心理学や臨床心理学では「彼の受動性が討論場面での沈黙を引き出しているようだ」などという原因論的説明に用いられることが珍しくない。また、質問紙への回答など特殊な条件のもとで判定されたパーソナリティ特性や類型を、会社や学校などそれとは全く異なる条件での行動の説明や予測についていることが多い。こうした原因論的説明、異なる先行条件での予測などは、傾性概念では本来仮定されない事柄であり、そうしたことは一般に理論的構成概念(あるいは仮説的構成概念)と呼ばれる種類の概念によって初めてなされることである。では、傾性概念であった素朴なパーソナリティ概念が心理学に導入される際に、理論的構成概念として用いられるような性質に変化したのだろうか。それとも、実際には傾性である概念を、なんらかの理由でそのまま理論的構成概念として用いているのだろうか。このことを論じるためには、まず心理学的説明において傾性概念と理論的構成概念がどのように異なり、それぞれどのように位置づけられているのかを概観せねばならない。

3. 2. 傾性概念と理論的構成概念

傾性概念と理論的構成概念とはそれが指し示す意味内容においても、心理学的説明における役割においても大きな違いがある。この後の討論では、論理記号による説明を用いながら、その違いと、両概念の特質について明らかにしたい。ここでは、刺激を S 、反応を R とあらわす。 S 、 R は単独のものであっても、複数の要素からなる刺激クラス、反応クラスであってもよい。また先行条件を C 、生体を O とあらわすこととする

3. 2. 1. 傾性概念

心理学で用いられる傾性概念の指示内容は図1のように表現できる。 C は刺激と生体の双方に影響する一定の先行条件であり、その条件下で刺激 S_a が、ある生体 O_1 に与えられたとき、反応 R_b が規則的に生じることが観察されたなら、この4者の関係全体に傾性 D_{ab} を帰属することができる。この場合、 D_{ab} の意味は C 、 S_a 、 R_b という外から観察可能な概念に完

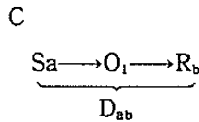


図1 傾性概念

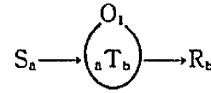


図2 理論的構成概念

全に還元可能であり、したがって傾性 D_{ab} は一定の条件下で、既知あるいは未知の要因の結果として生じた規則性を抽象的に記述しているに過ぎないことがわかる (2. 1.)。つまり、 R_b が規則的に生じる原因が C にあるのか、 S_a にあるのか、 O_1 の内部にあるのか、あるいはそのうちの2者あるいは3者の相互作用にあるのかという原因論的説明は、傾性概念によっては与えられないのである。また、 D_{ab} の成立には C が先行条件となっているが、 C が安定する限り D_{ab} には一定の時間的安定性があり、その範囲で次に S_a あるいはそれに類似した刺激が与えられたときに R_b かそれに類似した反応が生じることが予測される。しかし、 C が変化すれば規則性の先行条件が変化するわけだから、 D_{ab} が維持されるかどうかは保証されない。

B. F. Skinner (1974) のいう意味での「学習」は、典型的な傾性概念である (Weimer, 1984)。あるオペラント行動 R_o が、ある刺激 S_n が随伴する条件で強化された場合、次に S_n と同じかそれと類似した弁別刺激 S_d が与えられると、 R_o と同じあるいはそれに類似した反応 R_e が生じる。ここで生じた規則性を「学習」とよび、それに先行する手続きを「条件づけ」と呼ぶなら、「学習」は条件づけの過程とそれに後続して生じた刺激と反応の規則性という観察可能な概念に完全に還元される傾性概念なのである。したがって先行する条件づけ過程が安定している限り学習は維持されるが、それが変化すれば学習の概念からの行動予測は保証されなくなる。これに限らず、刺激と反応との関係の規則性を記述する概念で、観察可能な概念に還元可能なものは全て傾性概念である。この意味で、「操作的定義」が与えられる概念はすべて傾性概念であるということが出来る (MacCorquodale & Meehl, 1948)。

3. 2. 2. 理論的構成概念

傾性概念が原因論的説明を含まないことは繰り返し述べた通りだが、心理学者に限らず多くの科学者は観察された規則性を原因論的に説明したいと考えるものである。その場合、傾性概念をなんらかの「理論的構成概念 (theoretical construct)」に持ち上げることが一つの手段になる。「仮説的構成概念 (hypothetical construct)」は理論的構成概念とほぼ同義だし、「説明概念 (explanatory concept)」と呼ばれるものも、ほぼ同じものを指していると考えてよい。理論的構成概念の意味は図2のようにあらわすことができる。ある刺激 S_a と R_b との規則的關係が、 S_a 以外の外的変数に影響されていないと信じられる場合、先行条件は捨象され、その規則性を媒介している実体が生体内に存在していると考えられる。たとえば、図1の先行条件 C が全く同じである状況で複数の個体に刺激 S_a を与えたところ、ある個体では規則的に R_b が生じたが、ある個体では生じなかった場合、 C は同一なものとして先行条件の特定性を捨象し、それぞれの個体内部にあるなんらかの存在、あるいは過程に個体差があると考えられることができる。また、全く異なった先行条件の下でも安定して S_a と R_b との間に規則的關係が観察された (状況間安定性が観察された) 場合にも、その

規則性の主体を個体内部に置くことができる。そこで、 S_a と R_b 間で観察された規則性を生体内で媒介するものを意味する理論的構成概念 T_b が導入される。 T_b はそれ自体観察不可能であり、また観察可能な概念に還元されることもない。その存在は観察可能な概念との論理的結合によって保証されるが、 T_b はそれら観察可能な概念によって示される以上の意味を持つことが期待される。これを剰余意味 (surplus meaning) と呼ぶ。心理学における理論的構成概念の場合、剰余意味はなんらかの実体との対応、多くの場合は生体内の生理的過程との対応を指すことが多い (MacCorquodale & Meehl, 1948; Carnap, 1956)*6。

さきにあげた学習の例でいえば、全く同じ条件づけ手続きを複数の個体に行ったとき、個体 O_1 では $S_a \rightarrow R_c$ の規則性が観察され、個体 O_2 では観察されなかった場合、この個体差は生体内に原因があると考えられることもできる。そこで「 O_1 内部では学習が生じたが、 O_2 内部では学習が生じなかった」という記述をすると、「学習」は傾性概念から理論的構成概念へと生まれ変わる。そして、ここでは観察された規則性 (行動傾向) の原因を生体内の「学習」という理論的構成概念に置くという形で、原因論的説明が可能になるのである。この場合理論的構成概念「学習」の剰余意味は、中枢神経系の結合の変化などの生理学的実体との対応によって示されるだろう。今世紀の半ばにかけて、Hullは学習に関連するこうした理論的構成概念を「仲介変数 (intervening variable)」と呼んで行動説明に用い、生理学的根拠づけも多く行った (Hull, 1943 etc.)。しかし、仲介変数は実際には当時流行の操作的定義によって厳格に定義されており、Hullがどのような説明に用いたにしても、論理的には観察概念に還元可能な傾性概念である (MacCorquodale & Meehl, 1948)。傾性概念と理論的構成概念とのこのような混同は以後の心理学に大きな禍根を残した*7。よく、「概念がひとり歩きする」という表現が使われるが、これは多くの場合傾性概念が誤って理論的構成概念として用いられたときに起こることのようである。

さて、こうした理論的構成概念の導入の前提である、「観察可能な概念から説明できない規則性」の存在を証明することは、実際にはむずかしい。規則性の有無が、その時点では観察されなかった (必ずしも観察不可能であったと限らない) 外的条件、あるいは観察者側がその能力を持たなかったために観察不可能だった外的条件によって影響されていたとも考えられるからである。Skinnerはその点を重視し、従来理論的構成概念によって説明されていた規則性の多くが外的な強化随伴性という観察可能な概念に還元しうることを示して、理論的構成概念の安易な使用を戒めた (Skinner, 1974)。スキナリアンの目からみれば、理論的構成概念の導入はほとんどの場合全く必要ないだろう。こうした意味で、理論的構成概念による説明は、傾性概念による記述にはなかった原因論的説明を可能にするという点で魅力的だが、外的条件の処理が曖昧であるという欠点を持つといえる。とくに、単に観察されな

*6 もちろん、この実体は物理的でない「心的実在」あるいは「理論的実在」であってもよいのだが、その場合それが指し示すレファレントが曖昧になってしまう。また、心理学者の「自然科学志向」も、生理学実体による剰余意味の付与が好まれる一因だろう。血液型性格学の古川竹二など、性格の個人差の説明に血液型という生理学的実体を持ってきた点で心理学者の鑑といえるし、一般の人々が血液型性格学になにか漠然と科学的なものを感じるのもこうした生理学志向の影響ではないだろうか (大村, 1990, 佐藤・渡邊, 1991)。

*7 この後Hullの思想は特に教育心理学において大きな影響力を持ったが、その結果現象の記述と内的実体を混同する悪い癖がはびこった。「内発的動機づけ」に関する一連の奇妙な研究はそのよい例である。

かっただけの重要な外的条件の見落とし、あるいは観察された外的条件の軽視は重大である。このように、理論的構成概念を導入することが全て理論の進歩や予測力の増加を意味するものでないことは強調しても余りあるものである。むしろ傾性概念による記述のほうがずっと役立つことも多いことは、Skinner が指摘したとおりである(5)。

4. パーソナリティ諸概念は理論的構成概念か

4. 1. 理論的構成概念としてのパーソナリティ概念の特殊性

さて、性格、知能、動機づけ、欲求、心性など広義のパーソナリティ概念のほとんどは、その実体(4.2)はともかく、理論的構成概念として行動にみられる規則性の原因論的説明に用いられている。しかし、こうしたパーソナリティ概念には一般の理論的構成概念とは少し異なった特徴がある。それは、こうしたパーソナリティ概念は非常に多くのS→R規則性を同時に媒介しているということである。たとえば先にあげた理論的構成概念としての「学習」は単独のS→R規則性しか媒介しないが、内向性という概念はパーティーで人と話さないこと、友達と打ち解けないこと、一人で考え込むことが多いことなど、あらゆる場面における非常にたくさんの規則性の個別事例から構成され、それらの規則性を一度に説明してしまう。仮説的構成概念になったときにすでに先行条件の特定性が捨象されている上に、この説明範囲の広さからさまざまな刺激状況の特定性までもが捨象され、その結果パーソナリティ概念 P_0 だけで一群の反応 R_0 を説明するかのようになる。ここに、先行条件からも刺激条件からも独立に一連の行動を決定する内的実在としてのパーソナリティ概念が成立するのである。パーソナリティが「個人と特徴的な行動や志向を決定づける個人内の精神身体的な組織」などと定義されるのは、こうした論理構造をよく現している。

パーソナリティ概念がこのような性質を持つと、本来その概念が帰納論理に基づいて構成されたときにどのようなS→R規則性を基礎としてしていたのが不明確になり、極端な場合どんな条件で起きたどんなことでも説明できるオープンな理論的構成概念になってしまう。たとえば「人間性」というパーソナリティ概念はそのレファレントが全く不明確なので、動物を可愛がることも説明できれば、生きるために動物を殺して食べることも説明できる。このように、パーソナリティ概念は、何でも説明できるが何も説明できない、ということになりやすいのである(Mischel, 1968)。以上述べたような理論的構成概念としての特殊性は、パーソナリティ概念が本来的に持つ問題であり、パーソナリティ心理学の方法論における基本問題といえる。このことを議論するためには、パーソナリティ概念の構成論理とその本質についてより深く考察することが求められる。

4. 2. 心理学におけるパーソナリティ概念の構成論理

「パーソナリティとは、性格検査によって測られるもののことである」という操作的定義を行う場合、パーソナリティは観察可能な概念(テスト場面の特質、テスト刺激、それに対する反応など)に還元されうる傾性概念でしかない。また、R. B. Cattellのように「パーソナリティとはある場面における個人の行動を予測させるものである」と、予測概念としてのみ定義するなら、それは傾性概念であってもよい、あるいは傾性概念で十分であるといえる。

しかし多くの心理学者はパーソナリティを、状況とは独立に行動を内部から規定するなんらかの実体とみなしており、パーソナリティ概念を用いて行動の原因論的説明を行っていることは先にも述べたとおりである。前にあげたようにパーソナリティ概念を操作的に定義している人でも、それを実際に用いるときには状況を超えて一貫した行動の原因論的説明を行うことがほとんどである。ところが、パーソナリティ心理学の一部では、パーソナリティが状況を超えて一貫したものではなく、状況が変化すればパーソナリティ概念の予測力は保証されなかったことが実証的なデータから明らかだという、それまでのパーソナリティ概念の用法が根本から覆されるような主張がなされている (Mischel, 1968; Kenrick & Funder, 1988; 佐藤・渡邊, 1988)。こうした主張は、パーソナリティ概念の剰余意味を否定するものであり、これが事実ならばパーソナリティ概念は理論的構成概念としての地位を失うといってよい。パーソナリティ概念へのこうした批判は、もっぱらパーソナリティ概念の状況を超えた予測力と、その前提となる、行動の状況を超えた一貫性への反証データを提出するという形で行われる。しかし一方では、パーソナリティ概念が本来は傾性概念であり、単に誤って理論的構成概念と見なされているにすぎないことを方法論的に論証することによっても、同じ主張に行きつくのである。

素朴な構成概念と同様、心理学におけるパーソナリティ概念の多くが個別事例からの帰納的論理によって構成されていることには疑いがない。特に特性論的パーソナリティ概念ではそれが顕著である。特性論的パーソナリティ概念には多くの場合階層構造が仮定されていて、その頂点には根源的パーソナリティ特性があり、最下層に表面的行動特徴がある。この最下層から頂点へ間のどこかで、傾性概念が理論的構成概念に「発達する」のだが、その論理には疑問の余地が多い。こうした階層モデルの代表なものが H.J. Eysenck の主張するパーソナリティの階層構造 (図3) である (Eysenck, 1967 etc.)。最下層の特殊反応は「個人が一定の状況下で一定の仕方で繰り返す行動様式」と定義されており、観察可能な概念に還元可能な傾性概念である。その上にある習慣的反応*は「さまざまな状況下で反復して現れる行動」と定義されているが、特殊反応がそこへ集約される基準は同一個体における同時生起的あるいは相関的關係以外にない。すると、その共通性は同一の観察可能な状況の変数に依存

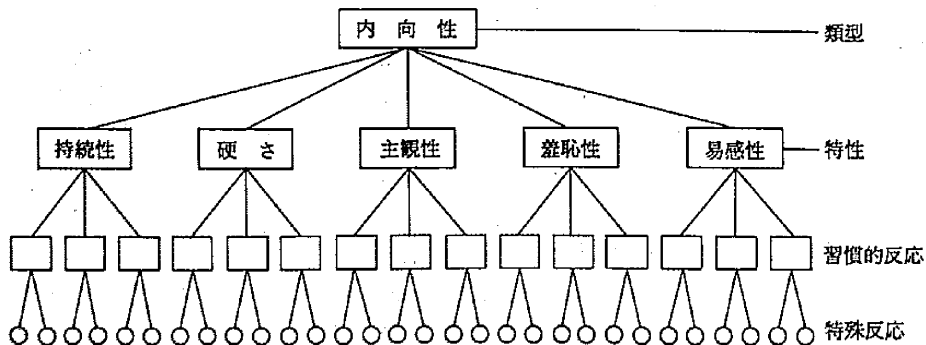


図3 Eysenckのパーソナリティ階層構造

*8 Hullの仲介変数「習慣」と似ているところがおもしろい。仲介変数が実は傾性概念であることは先に述べた通りである。

している可能性があるから、習慣的反応も仮説的構成概念にはならない。たとえば、先にてた例(2.1.)でB君がA子さんに示したいくつかの「優しい」行動は相関しているが、その規則性がA君の内的要因に原因しているのか、先行条件の安定性に原因しているのかはわからないのである。したがって、こうした上位概念はいくつかの特殊傾性の同時生起的関係、あるいは相関的關係を記述した二次的傾性(secondary disposition; Weimer, 1984)と呼べるものに過ぎず、下位傾性やそれを構成していた観察可能な概念に還元可能である。当然、そこでは下位傾性の成立条件であった外的変数を捨象することはできないのである。モデルはさらに特性、類型と上位の構成概念へと登っていくが、この過程で行われていることも、傾性間の相関を記述する、より上位の傾性への集約であり、どの段階でも先行条件を捨象して内的実体に規則性の原因を帰属することは不可能である。ところがEysenckはパーソナリティを「遺伝と環境によって決定される実際のあるいは潜在的な行動パターンの総体であって、環境に対する独自の行動様式を決定する組織体」と定義している。前半はまあよいとしても、後半はそれを内的実体と結び付けることによって理論的構成概念化している。そればかりか彼は内向性、外向性という最上位のパーソナリティ概念を大脳皮質の制止過程と結び付けて、理論的構成概念としての剰余意味を高めようとしているのである。

このように、傾性概念をその相関関係から集約しただけの概念でも、個別事例が背後に追いやられることによって、まるで先行条件を捨象した理論的構成概念であるかのように見え、先行条件に関係なく行動を決定する内的実体と混同されてしまうのである。実際には、傾性の集約によって構成されるパーソナリティ概念はそれ自体傾性概念であり、それが下位の傾性や個々のS→R規則性に対して持つ予測力は、それら全体に影響する先行条件の安定性によって一定期間保証されるのみである。また、上位概念から下位概念への原因論的説明が全く保証されないことはいうまでもない。こうした奇妙な論理的誤りには、Eysenck以外の多くの心理学者も惑わされてしまった。心理学的パーソナリティ概念による行動説明の多くがこうした誤りを大なり小なり含んでいることにはほとんど疑いがない(Mischel, 1968)。また、この構造的誤りが先にみた素朴な構成概念における誤り、すなわち先行条件の捨象、内的実体への投影による結果の原因化、時間的安定性の状況的安定性へのすり替えをすべて含んでいることにも注意する必要がある。つまりパーソナリティ心理学は、素朴なパーソナリティ概念を導入したときに、それに内在していた論理的誤りをも同時に導入してしまったのである。もちろん、パーソナリティ心理学者たちは「われわれの説明は科学的手続きを踏んだものであり、素人のパーソナリティ観と一緒にしてもらっては困る」等と反論するだろうが、彼らの言う科学的手続きとは質問紙に列挙した個別傾性を因子分析してこういう特性を導き出したとか、測定法の信頼性は統計的に保証されたとかいうレベルのものであって、説明論理の正当性とは関係がない。極端にいえば「星占いも最近ではコンピュータ処理になって科学的になったのよ」とか、「血液型性格学は占いではなく統計学である」といった主張と同じである(大村, 1990参照)。パーソナリティ心理学が未だ素朴心理学の域を脱していないといわれるのは、まさにこの点を指してのことなのである。

5. パーソナリティという傾性概念と行動の説明

5. 1. 傾性概念としてのパーソナリティ概念の位置

以上の討論によって、心理学的説明に用いられているパーソナリティ概念は、その基礎となっている素朴なパーソナリティ概念と同様、一定の先行条件の下で成立した刺激と反応の規則的関係を抽象的に記述した傾性概念、あるいはそうした傾性概念を相関的關係から集約した二次的傾性概念であることが論証された。そして、傾性概念であるパーソナリティ概念が、理論的構成概念として内的実体と対応するののかのように取り扱われ、行動の規則性を原因論的に説明するために用いられているのは、素朴なパーソナリティ概念において生じていたのと同じ論理的誤りの結果であることも明らかになった。したがってパーソナリティ概念による行動の予測は、それが記述している規則性の先行条件となった、さまざまな状況的変数に大きく依存するものであり、現在行われているような状況要因を捨象したパーソナリティ概念だけによる行動説明や行動予測は、厳に慎まれなければならないといえる。とはいえ、このことによって心理学におけるパーソナリティ概念の有用性が低下したと考えるのは尚早といえる。むしろ、その傾性概念的性質をよく把握し、それが説明している範囲を明らかにすることが、パーソナリティ概念の有用性を明確にし、心理学における適切な位置づけを保證するといってもよいのである。

個人が示す独得の行動パターン、すなわちパーソナリティは、環境と人、行動の3者がありなす複雑な力動的相互作用の現象型である。力動的相互作用とは、各要素が独立ではなく、互いに相互依存的な関係を持った構造であり、ある要素のありかたは常に他の要素との関係に規定される。こうした相互作用はあまりに複雑であるため、現在の心理学の水準ではそれを説き明かすことはほとんど不可能である。ただし、その現象型は「特定の条件下での行動の規則性」という傾性の形をとって現れる。そこで、素朴な知覚者やこれまでの心理学は傾性概念によってこれを記述することで、個人のパーソナリティを把握してきたのである(渡邊, 1990)。傾性概念としてのパーソナリティ概念は、こうした複雑な相互作用全体から何も捨象しないで構成された抽象概念であり、そうした相互作用自体を現在は適切に分析できない以上、依然パーソナリティを把握するための唯一最善の構成概念であり続けている。たしかにそれは原因論的説明を与えないという点で、なんでもニュートン力学的に説明しないと納まらない人々^{*9}には不満かも知れないが、彼らがよく用いる「結果の原因化」でしかない理論的構成概念よりもずっとましであるし、先行要因さえ配慮すれば行動の予測と制御ができる。

5. 2. 傾性概念に基づく行動の予測と制御

心理学における傾性概念の最大の有用性は、先行条件が安定している場合に限り行動の予測が可能である、ということである。その概念的な位置づけの誤りにもかかわらず、これまでパーソナリティ概念が有効なものと思なされ、応用場面でも行動予測に役立っていたのには、

*9 「認知的」社会心理学者や臨床心理学者によくみられる。こういう人々は2頁も3頁もあるモデルを立てるのが好きである。

パーソナリティ測定とその利用がパーソナリティ概念の傾性的性質に合致した形で行われてきたことが関係している(渡邊, 1990)。すなわち, 先行条件を限定した形で測定したパーソナリティ概念を, それと類似した先行条件が存在する場面での行動予測に用いているのである。たとえば, 「対人恐怖」尺度は, 対人場面という特定の先行条件における行動パターンを測定しているが, その尺度値によって予測されるのは対人場面における不安反応だけであって, この結果から高所恐怖の反応を予測しようと思う人はいないだろう。また, 著者らがMPIの項目を分析したところ, 「パーティーなどでとても愉快だと思えますか」といったように特定の状況での反応傾向を尋ねる質問(状況特定型項目)が, 実に全体の60%もあった(佐藤・渡邊, 1990)。こうした実際の使用例が明らかにしているように, 先行条件による特定性が考慮されているかぎり傾性概念は予測力を持ちうるし, 先行条件がもし適切に統制されれば, 行動の規則性を制御することもできる。しかしパーソナリティ概念は, 実際にはこういう使い方をされながら, 方法論的には仮説的構成概念と位置づけられていたので, 先行条件の重要性が強調されることは少なかった。そのため, 傾性概念としてのパーソナリティ概念の有用性は十分に発揮されなかったのである。

パーソナリティ概念が傾性概念であることが広く知られれば, その行動予測力が先行条件の安定性に規定されることが前提になるので, まず各傾性が含む先行条件をなるべく詳細に記述することが求められる。傾性が構成された場面の条件だけでなく, その人が関連する刺激に関して持つ強化歴など, 時間的に先行する要因も調べなければならない。また, そうした先行条件とどれくらい類似した条件であれば行動の規則性が生じるのか, すなわち先行条件の般化と弁別についても調べなければならない。これらが明らかになれば, ある傾性による予測が適用できる範囲が明確になり, それを守られる範囲で傾性概念の行動予測力は飛躍的に増大するであろう。また, ある規則性が生じる先行条件の詳細が明らかになれば, それを人工的に整えることによって望ましい行動を引き出すこと, すなわちパーソナリティ概念の枠内での行動の制御も期待されるのである。さて, 読者はこうした手続きがSkinnerの行動分析によく似ていることに気づかれたであろう。先にもふれたが, Skinnerのアプローチは傾性概念を用いた行動分析の理想的な形であり, 傾性的分析を効果的に行うにおいて彼の思想を無視することはできない。Weimer(1984)は, 心理学における構成概念のほとんどは, その使われ方はともかく本質的には傾性概念であり, 心理学的分析の主流は傾性的分析であるとしている。それが本当ならば, Skinnerの方法は現存する心理学の理想的な姿である, ということすらできるだろう。さて, 傾性概念に特有の性質を理解し, 先行条件を明確に分析することが可能になれば, パーソナリティ概念は傾性概念のままで行動の予測と制御に役立つようになる。できないのは行動の原因論的説明だけだが, パーソナリティに関する現存の理論的構成概念による原因論的説明は間違っているし, 行動の予測力も傾性概念が真の力を発揮したときよりずっと小さいだろう。第一, 予測と制御が可能になったなら, 原因論的説明ができないことや, 人間の内部の過程がわからないことなど, それほど問題ではないとは考えられないだろうか。これはもう, 研究者の趣味や嗜好に関する問題に属するかも知れないが, 原因論的説明や内的実体への飽くなき探訪は心理学者の「基本的欲求」だと

*10 この論文の構想をまとめている時(1990年8月21日)に, B.F.Skinnerの訃報が届いた(没日は8月18日)。Skinner先生の思想と業績に敬意を表し, 冥福をお祈りする。

しても、ことパーソナリティ心理学に関してはその欲求はかえって混乱と停滞を生み出してばかりいたように思える。Skinner (1974)*10は、人間内部の実体を根拠にした説明は、環境による制御という説明よりも「深みがある」ので好まれる、と述べているが、深みとかそういうものを求めるのであれば、心理学の本など読む前に東西の古典や名著をひもといた方が楽しいし実になるので、われわれとしてはそちらをお勧めしたい。

引用文献

- Carnap, R. 1936, 1937 Testability and Meaning 1-4. *Philosophy of Science*, 3, 420-468; 4, 1-40 永井成男訳 「テスト可能性と意味」。「カルナップ哲学論集」紀伊國屋書店, 1977に所収
- Carnap, R. 1956 The Methodological Character of Theoretical Concepts. in H. Feigl & M. Scriven (eds.), *Minnesota Studies in the Philosophy of Science*, Vol. 1 Univ. of Minnesota Press 竹尾治一郎訳 「理論的概念の方法論的性格」。「カルナップ哲学論集」紀伊國屋書店, 1977に所収
- Eysenck, H. J. 1967 *The biological basis of personality*. Charles C. Thomas
- Hull, C. L. 1943 *Principles of Behavior: An introduction to behavior theory*, Appleton-Century-Crofts. 能見・岡本訳「行動の原理」誠信書房, 1960
- Jones, E. E. & Nisbett, R. E. 1972 The actor and the observer: Divergent perceptions on the causes of behavior. in Jones et al. (eds) *Attribution: Perceiving the causes of behavior*. General Learning Press
- Kenrick, D. T. & Funder, D. C. 1988 Profiting from Controversy: Lessons from the person situation debate. *American Psychologist*, 43, 23-34
- MaCorquodale, K. & Meehl, P. E. 1948 On a distinction between hypothetical constructs and intervening variables. *Psychological Review*, 55, 95-107
- Mischel, W. 1968 *Personality and Assessment*. Wiley
- 大村政男 1990 血液型と性格 福村出版
- Ryle, G. 1949 *The Concept of Mind*. Hutchinson. 坂本百大, 宮下治子, 服部裕幸訳 「心の概念」みすず書房, 1987
- 佐藤達哉 1990 これまでのパーソナリティ概念に関するいくつかの疑問。日本心理学会第54回大会 シンポジウム論文
- 佐藤達哉・渡邊芳之 1988 パーソナリティ理論の実証的再構成に向けて(1): パーソナリティの素朴実在論をこえて。日本社会心理学会第29回大会発表論文集
- 佐藤達哉・渡邊芳之 1990 内弁慶は内的性格特性か: パーソナリティ概念やその尺度を再考しよう。日本発達心理学会第1回大会発表論文集
- 佐藤達哉・渡邊芳之 1991 血液型性格関連説と人々の性格観。東京都立大学人文学部「人文学報」(印刷中)
- Skinner, B. F. 1974 *About Behaviorism*. Alfred A. Knopf
大田充訳「行動工学とは何か」佑学社, 1975
- Weimer, W. B. 1984 Limitations of the Dispositional Analysis of Behavior. in J. R. Royce & L. P. Mos (eds.) *Annals of Theoretical Psychology*, 1, 161-198
- 渡邊芳之 1990 「パーソナリティ」とは、人間と状況との相互作用全体をとらえる構成概念である。日本心理学会第54回大会 シンポジウム論文

渡邊芳之・佐藤達哉 1989 パーソナリティ理論の実証的再構成に向けて(2): パーソナリティ研究の方法論的諸問題。日本社会心理学会第30回大会発表論文集

渡邊芳之・佐藤達哉 1990 パーソナリティ理論の実証的再構成に向けて(3): 内的実体論から相互作用論へ, 結果の記述から原因の探究へ。日本社会心理学会第31回発表論文集